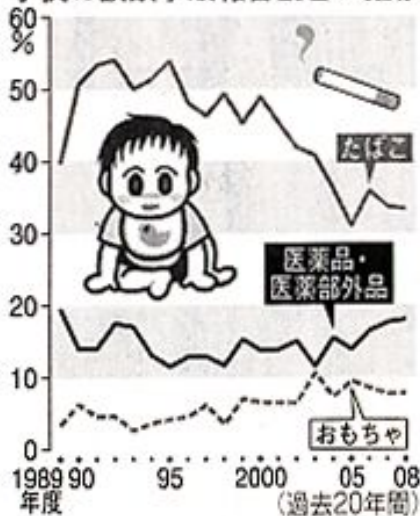


子供の誤飲、3割超たばこ

30年連続多 「親の認識の甘さ不変」

H.22.2.2

子供の誤飲事故報告割合の推移



害病院モニター報告」で分かった。

財団法人日本中毒情報センターは「たばこの誤飲事故が多いのは畳の上での生活が多い日本特有の傾向。大人の不注意で床や低いテーブルなど乳幼児の手が届きやすい場所にたばこが置かれる」と分析する。

禁煙志向が高まり、たばこが誤飲事故全体に占める割合は減少傾向にあるが、厚生省の担当者は「世代が変わっても親の認識の甘さは不変。乳幼児が飲み込んでしまう危険があることを十分認識して

ほしい」と注意を呼び掛けている。

今回の報告は、全国7カ所の病院で扱った477件の誤飲事故を集計。このうちたばこは159件で、全体に占める割合は前年度(33・6%)とほぼ同じ。年齢別では生後6カ月～1歳半に集中しており、139件にのぼった。

1本の約3分の2を食べて顔色が悪くなったところを母親が発見して病院に運んだり、灰皿代わりにしていた空き缶の吸い殻入りの水を飲んだりしたケースがあった。

家庭で起きる子供の誤飲事故のうち、2008年度に最も多かったのは「たばこ」(33・3%)で、1979年度の調査開始以来、30年連続で最多となったことが1日までに、厚生労働省の「家庭用品などにかかる健康被